



# キャンディ



kou

## 非常事態の中の憂鬱と停止

---

一年前、世界でミツバチが消えた。その時、僕は町に住んでいて、何不自由なく暮らし、そのことに対して何も感じなかった。でも町の人たちは違った。

「非常事態じゃのお」

町の老人が深刻な表情でいった。

その時の僕は、何が非常事態なのかわからなかった。その深刻さがわかったのは数ヶ月後だった。大半の食糧が生産できなくなっていた。

「食糧、節約してね」

母親がそういった。

どうやらミツバチが僕らの生活にもたらしていたものはより多くのものだったらしい。果樹や農業、そのた微生物や昆虫など、様々な生態系に影響を与えていた。

「ミツバチの花粉交配がないと、作物が育たん」

老人がいった。

ミツバチを求めて、町を去っていったものたちが後を立たなかった。僕の両親もその中に含まれていた。

「お前はいかないのか？」

父親は強い眼差しを僕に向けた。

「ここで待ってるよ」

この町にいればなにかしら起るのではないか、という予感めいたものが僕にはあった。

「必ず戻ってくるから」

だが、両親は一年経った今も戻っていない。

気づけば僕一人が町に存在していた。他の人たちは故郷を捨て、別の土地に移ったようだ。でも、どこの土地もミツバチがいなくなったのなら同じような結果だと、僕は思った。

## 孤独は人を求め光を降らす

---

食べ物に関しては一人ということもあり困らなかった。昔のようにイチゴやチョコレートという贅沢な品は、みんなが持って行ったということもあるが、すぐに底をついた。

やれやれ、この先どうなるのか。

一人になり、まず最初に感じたのは`孤独、だった。こんなにも人と話さなかったのははじめてだった。

人恋しい。

いつもは当たり前と思っていた日常が恋しかった。人は喜びや、苦しみや、悲しみ、楽しさ、あらゆる感情を共有してこそ存在する意味があるのだな、と僕は思った。それでも自分でこの場所に残ると決めたので弱音を吐くわけにはいかなかった。

夜になり空には無数の星がまばゆい光を放っていた。ちかちかする空の点滅に僕は、「この先どうなるの」

と声を大にして叫んだ。

その声に反応したのか、黄色い閃光が空から降ってきた。

僕は目を見開いた。最初は流星かと思ったが、どうやら違うようだ。それが町に落ちたように見えた。

僕は走った。

少し息を切らせながら、黄色い閃光が降ってきたであろう、畑がある場所へ向った

そこには体育座りをしている少女がいた。黄色いワンピースを着ていた。僕はおそるおそる近づいた。近づくとつれ、甘い匂いが彼女から漂っていた。

「大丈夫？」

僕は彼女に声をかけた。しかし反応はなかった。もう一度、声をかけたが結果は同じだった。

なので僕は待つことにした。こういうときは忍耐だと思った。なにがなんだかわからない状況になったら `待つ、それが僕に出来る唯一の選択だ。

それから僕は数十分、いや、数時間その場にいた。空を見上げ、荒れ果てた畑を見回し、靴にこぼりついた泥を手で払った。それを何回か繰り返した。そうすることしか僕にはできなかった。

少女は寝ているのだろうか？生きてることは間違いない。肩が上下して呼吸をしていることは感じられた。

僕も眠くなった。少女と同じように体育座りをし、目を閉じた。

「ん、うう」

とうなり声が聞こえた。

僕は顔を上げた。

少女は立ち上がり、僕を見ていた。

「やっぱり、こうなったのね」

少女がそう言い、ワンピースに付着した泥を払った。

「こうなったとは？」

僕はきいた。

「ミツバチがいなくなったでしょ？」

僕は軽くうなずいた。

「ミツバチもストレスが溜まってるのよ。逃げ出したくなるわ。私はそれを知ってる」

「知ってる？」

少女から漂う甘い匂いはハチミツの香りに似ていた。

「人って起った後に気づくのよね。事の重大さに」

「それはいえてる」

「これあげるわ」

少女がどこから取出したのかはわからないが、キャンディを僕にくれた。

「君は誰なの？」

僕は彼女から手渡されたキャンディを口に放り込み舐めた。ハチミツの味がした。

「それはいずれわかるわ。それよりも人はあなただけ？」

「そうだよ。みんな別の土地へ移って行った。ミツバチを探しにいったのかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「ミツバチはもういないわ」

彼女は空を見上げた。僕の勘違いでなければ、彼女の目元から涙が一雫流れた。その涙も甘いかもしれない。

「ミツバチが必要でしょ？」

彼女は言い、「うん」と僕はうなずいた。

「じゃあ、手伝って」

そう言って、彼女は畑に何かを蒔いた。

「それはなに？」

「あなたにさっきあげたキャンディよ。これはミツバチの大好物なの」

僕は彼女からキャンディを手渡された。

少女と同じように僕も畑にキャンディを蒔いた。キャンディが偏らないように、均等に蒔いた。僕はそういうことにこだわるが彼女はこだわらなかった。

辺りに甘い匂いが広がった。

こんなことをして何が変わるのだろうか？

でも何か行動を起こさないと何も始まらないのかもしれない。

「明日を待ちましょう」

キャンディを蒔き終えた彼女が当然のようにいった。僕もそれに従った。

ずっとここにいるわけもいかず少女を僕の家案内した。

家に入るなり少女は、水を飲んだ。そこには迷いはなかった。水を飲むということが彼女にとって重要な一部だというように。

「水分は重要ね。人も動物も植物も。全てに感謝しないと」

少女は微笑んだ。それは星のように輝きを放った笑顔だった。

その後、僕らは眠りに入った。少女のために僕は簡易ベッドを物置から出した。彼女は喜んでいた。

## 少女と僕とキャンディの使命

---

そこには体育座りをしている少女がいた。黄色いワンピースを着ていた。僕はおそるおそる近づいた。近づくとつれ、甘い匂いが彼女から漂っていた。

「大丈夫？」

僕は彼女に声をかけた。しかし反応はなかった。もう一度、声をかけたが結果は同じだった。

なので僕は待つことにした。こういうときは忍耐だと思った。なにがなんだかわからない状況になったら `待つ、それが僕に出来る唯一の選択だ。

それから僕は数十分、いや、数時間その場にいた。空を見上げ、荒れ果てた畑を見回し、靴にこぼりついた泥を手で払った。それを何回か繰り返した。そうすることしか僕にはできなかった。

少女は寝ているのだろうか？生きてることは間違いない。肩が上下して呼吸をしていることは感じられた。

僕も眠くなった。少女と同じように体育座りをし、目を閉じた。

「ん、うう」

とうなり声が聞こえた。

僕は顔を上げた。

少女は立ち上がり、僕を見ていた。

「やっぱり、こうなったのね」

少女がそう言い、ワンピースに付着した泥を払った。

「こうなったとは？」

僕はきいた。

「ミツバチがいなくなったでしょ？」

僕は軽くうなずいた。

「ミツバチもストレスが溜まってるのよ。逃げ出したくなるわ。私はそれを知ってる」

「知ってる？」

少女から漂う甘い匂いはハチミツの香りに似ていた。

「人って起った後に気づくのよね。事の重大さに」

「それはいえてる」

「これあげるわ」

少女がどこから取出したのかはわからないが、キャンディを僕にくれた。

「君は誰なの？」

僕は彼女から手渡されたキャンディを口に放り込み舐めた。ハチミツの味がした。

「それはいずれわかるわ。それよりも人はあなただけ？」

「そうだよ。みんな別の土地へ移って行った。ミツバチを探しにいったのかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「ミツバチはもういないわ」

彼女は空を見上げた。僕の勘違いでなければ、彼女の目元から涙が一雫流れた。その涙も甘いかもしれない。

「ミツバチが必要でしょ？」

彼女は言い、「うん」と僕はうなずいた。

「じゃあ、手伝って」

そう言って、彼女は畑に何かを蒔いた。

「それはなに？」

「あなたにさっきあげたキャンディよ。これはミツバチの大好物なの」

僕は彼女からキャンディを手渡された。

少女と同じように僕も畑にキャンディを蒔いた。キャンディが偏らないように、均等に蒔いた。僕はそういうことにこだわるが彼女はこだわらなかった。

辺りに甘い匂いが広がった。

こんなことをして何が変わるのだろうか？

でも何か行動を起こさないと何も始まらないのかもしれない。

「明日を待ちましょう」

キャンディを蒔き終えた彼女が当然のようにいった。僕もそれに従った。

ずっとここにいるわけもいかず少女を僕の家案内した。

家に入るなり少女は、水を飲んだ。そこには迷いはなかった。水を飲むということが彼女にとって重要な一部だというように。

「水分は重要ね。人も動物も植物も。全てに感謝しないと」

少女は微笑んだ。それは星のように輝きを放った笑顔だった。

その後、僕らは眠りに入った。少女のために僕は簡易ベッドを物置から出した。彼女は喜んでいた